
『日本召還 外伝』

にしなさとる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『日本召還 外伝』

【Nコード】

N4176R

【作者名】

にしなさとる

【あらすじ】

この小説は、ピング様作『日本召還』（<http://ncode.syosetu.com/n1361r/>）の二次創作です。

本編に登場する『人食いエルフ』たちの末路を、短編集の形で描きます。

内容上、どうしても残酷な描写が多くなると思いますので、ご注意ください。

それを承知の上で読んでくださいますよう、お願い申し上げます。

『自分にとって当たり前のことは、疑ってもみない』ことが、どれほど恐ろしい罠なのか、それを考えてみてください。

01「末路」

聖暦6000年4月下旬 西方州の一角 森と草原の境界付近

「困ったわね」

思わず、そんな言葉が口をついて出る。実際、私は今困り果てていた。仲間二人も表情が冴えない。

私の名はエルブレイ・マターハ・ナーウ。他の二人はウィリーとラウル。三人とも、東方州では名を知られた冒険者だ。自慢ではないが、十年ほど前には種族の危機を救うきっかけを作り、英雄視されたこともある。

今回の依頼、当初は楽なものと思われていた。西方州で何か異変が起こったらしいという話を聞いたのが、今から3月余り前。それが何かを調べて欲しいという依頼が来たのが、その半月ほどのこと。要するにただの偵察で、いたって楽な仕事と思われた。

ところが、大陸を西へ向かうにつれ、そんな生やさしいものではないことが判った。エルフの死体や、西方から逃げて来たというエルフ達に、幾度か出くわしたのである。

彼らの話は皆、ほとんど同じであった。『大日本帝国』と名乗る人間の原種たちが、大挙して攻め寄せて来たというのだ。そいつらは凶暴な上に、エルフの魔法より強力な魔法を使うと言っのだ。

そいつらの魔法は、私たちの魔法とはまったく違ったものであるらしく、魔法反応がまったく無いと言う。にもかかわらず、エルフ

の魔法よりずっと遠距離から攻撃できる上、最も強力な魔法は、皆を一撃で吹き飛ばすほどだと言う。

おまけに、そいつらはエルフをひどく憎んでいるらしく、エルフと見れば、赤ん坊に至るまで皆殺しにしようのだ。そいつらのおかげで、西方州の王城は崩れ落ち、王も死亡。州都をはじめ、街はことごとく瓦礫の山となり、住民のほとんどは殺され、生き残った者もちりぢりばらだと言うのだ。

もちろん最初は信じなかった。いかに原種とはいえ、そんなにも強い人間など、いるわけがない。魔法を使える人間など、いるわけがない。エルフがかなわない人間など、いるわけがないと。

しかし、さらに西に進むにつれ、同じように逃げて来たエルフ達と、何度も出くわしたのである。中には息も絶え絶えな者、身体にあちこちに火傷を負った者、手足を失った者さえ何人もいた。

彼らの言い分も皆同じであつたことで、私たちは戦慄した。信じざるを得なくなった。凶暴な人間原種どもが、この大陸に攻め寄せて来たことを。そいつらはとてもなく強力で、西方州を事実上滅ぼせるだけの力を持っていることを。西方の、数十万のエルフを殺せるだけの力を持っていることを。

一時は、このままとって返して、東方へ報告に走ろうかと思った。しかしそれに、ラウルが異を唱えた。「信じてもらえない」と言うのだ。

「こんなことを報告しても、誰も信じる筈がない。笑いものにされるのが落ちだ」と言うのだ。

いかにもその通りだった。我々として、逃げて来た者達をこの目で見ない限り、信じはしなかったのだ。こんなことを東方に報告したところで、信じてもらえる筈がない。良くて笑いもの、悪ければ間違い扱いされるのが落ちだろう。

ウィリーは、「逃げて来た者達を何人が連れて帰れば、ある程度は信じてもらえる」と言ったが、そこで私が、あることに気がついた。信じてもらえたらもらえただ、別の問題が有ることに。

もしこのまま、『大日本帝国』のことを何も調べずに帰ったら、「つまりお前たちは、その『大日本帝国』とやらに怯えて、逃げ帰って来たのだな？ 人間に怯えて、逃げ帰って来たのだな？」と言われても、言い返せないことになる。

そんなことになったら、我々の評判は、それこそ地に落ちるだろう。「エルフが人間に怯えて逃げ帰って来た」などという噂を立てられたら、冒険者としては致命傷だ。

このままでは帰れない。とにかく、『大日本帝国』について、少しでも情報を集めねばならない。それゆえ、逃げて来た者達から聞いた情報を頼りに、『大日本帝国』の人間どもが住む地へと、たどり着いたわけだが……。

厄介なことに、やつらは一箇所に固まって住んでいる上、強いかかわらず、意外に用心深い。カーキ色の服を着、短い槍を持った雄人たちが、常に何匹も周囲を警戒していて、なかなか忍び込む隙が見いだせない。

かといって、やつらの集落を外から眺めてみても、ほとんど何も判らない。いや、やつらがいくつもの奇妙な道具を使っていることは判った。しかし、それがどんな物なのか判らなければ、結局何も判らないのと同じだ。

暗ければ何とかなるのでは、と夜の闇に望みを託してみたが——
「これもやつらの魔法なのだろうか。やつらは、信じられないくらい明るい灯りを持っていて、夜でも周囲を煌々と照らし出している。そんな灯りの中へ出て行けば、「見つけてください」と言っているようなものだ。

うかつに近づけない。こうなれば我慢比べ。やつらが少しでも隙を見せるのを待つて、忍び込むしかない——。そう考え、もう四日待っているのだが、やつらはいっこうに隙を見せない。正直こちらの方が疲れてきた。一旦引き上げて、出直すしかないだろうか——。

そんなことを考え始めた、太陽が冲天を少し過ぎた頃だった——。疲れと焦りで、私たちの方に「心の隙」が出来てしまっていたのだらう。練達の冒険者らしからぬミスをやってしまった。

最も近くで周囲を警戒していた二匹の雄人が、二言三言言葉を交わした後、そばの天幕へと入っていく。「好機！」とばかり私たちは駆け出した。このわずかな隙に、内側へ潜り込んでやると——。

しかし、それは油断だった。そうでなくとも、軽率な行動だった。突然何かが飛んできて、目の前に転がったかと思うと、大音響と共に爆発。私たちは爆風に吹き飛ばされ、「畏にはまった！」ことを悟る間も無く、意識を失ったのだった——。

どれだけの時間が過ぎたのだろう。私が意識を取り戻したのは、全身に感じる肌寒さと、「エルブレイ！ エルブレイ！」と呼びかける声のせいだった。

はっと目を開け、周囲を見回す。——私の左右で、ウイリーとラウルが、丸裸で杭に縛り付けられていた。二人とも、沈痛な顔をしている。自分の身体を見下ろすと、私も同じ状態であることが判った。

何があつたのかははつきりしていた。私たちは『大日本帝国』に捕らえられたのだ！ それもこんなに呆気なく！ やつらがなぜ、我々をすぐ殺さなかったのかも想像がつく。やつらは我々を『処刑』するつもりなのだ！ おそらくは、多数の人間どもの目の前で！ おまけに、杖も他のアイテムも取り上げられてしまっている。これでは魔法が使えず、抵抗もできない！

なんということだろう！ 冒険者などをやっている以上、いつか殺されるかもしれないことは覚悟していた。しかし、下等な人間どもに、『処刑』されるとは、なんたる恥辱か！ 屈辱に歯噛みしていると、視界の隅で何かが動くのが見えた。

なぜ、すぐに気づかなかったのか——。あのカーキ色の服を着た雄人が一人、岩に腰を下ろして我々を見張っていたのだ。そいつは近づいてくると、ニヤリと蔑むような笑みを浮かべ、私の顔にペツと唾を吐いた。

「何ー！」

「きさま！ 人間がエルフに何を！」

あまりの恥辱に私とラウルがそう叫ぶが、雄人は少しも動じず、無言のままラウルとウイリーの顔に、やはり唾を吐きかける。

怒りのあまり、もう声すら出ない私達3人。雄人はそんな我々を、やはり蔑むように見ると、何か小さな物を取り出し、口にくわえた。

それは笛だったらしく、「ヒュイイーッ！」と鋭い音が響く。それを聞きつけ、しばらくすると、雄人たちが二、三十匹姿を現した。その内の二匹は、狼に似た獣を、それぞれ3匹ずつ引き連れている。

中から一匹の、年かさらしい雄人が進み出た。いよいよ我々を処刑するつもりなのだろう。しかし私は、不思議と恐怖は感じなかった。むしろ屈辱と、怒りのほうが強かった。

その雄人は、私たちをゆっくりと見回すと、誰に言うともなしに言い出す。

「人喰いの悪鬼どもも、こうなるとみじめなものだな」

『ヒトクイノアツキ』というのが何なのかは判らなかったが、こいつが我々を侮辱していることは解った。

「お前たち！ 人間がエルフに、こんなことをしていいと思っているのー！」

——負け惜しみの空威張りだということは、もちろん解っていた。解っていて、そうせずにはいらなかったのである。しかし、丸裸で杭に縛られたまま叫んでも、動じる奴などいない。そいつは無言のままこちらに近づくと、いきなり私の腹に拳を叩き込んだ。

「ゲエツ！ ゲホゲホツ！」

激痛にぶざまな声を上げ、思わず咳き込んでしまう。恥辱で顔を真っ赤にする私。そんな私を怒りの眼で見ながら、そいつは叫んだ。

「そちらこそ、人間にそんな口をきいていいと思っているのか！ ケダモノの分際で！」

一瞬とまどう私——その言葉の意味が解った時、私は腹の痛みも忘れ、大声で叫び出していた。

「け、ケダモノですって！ ケダモノですって！ 私たちが！」

「人間がエルフをケダモノと呼ぶのか！」

「そうだ。我々にとって、貴様らえるふはすべてケダモノだ」

「すべてケダモノだと！ なぜそんなことが言える！」

「なぜかだど？！ 決まっているだろう！ 貴様らえるふが人間を喰うからだ！」

「エルフが人間を食べて何が悪いの！」

「人間は、神がエルフに与えた家畜なのだぞ！ それを食って何が

悪い！」

「なぜ悪いかだと……解らんなら教えてやる！！ 仮に、だ……。貴様らえるふの中に、同じえるふを好んで喰う奴がいたでしょう。そいつをお前らは、えるふだと認めるか？」

「バカにしないでよ！……ってまさか！」

相手の言わんとすることに気づき、私は絶句した。

「——解ったようだな。そう、貴様らとて、同じえるふを喰うような奴は、ケダモノとしか見なさんだろう？ それと同じで、我々は、人間を喰うような奴はすべてケダモノとしか見なさんし、扱わん」

「馬鹿な…… エルフはケダモノではなく、人間はケダモノ。神がそう定められた筈だ！ ケダモノを喰って何が悪い？！」

「そうだ！ ケダモノの人間が、エルフをケダモノ扱いするということのか！ エルフより絶対に劣る人間が、我々をケダモノ扱いするということのか！」

私が解ったことが解らなかつたらしいラウルとウイリーが、そんなことを言い出す。しかしこの場でそんなことを言っても、負け惜しみにしかならない。案の定、相手はそれをあつさり否定した。

「えるふが人間より絶対に優る？ そんなことを誰が決めたのだ？」

「神だ！ 魔法が使えない人間は、エルフに絶対に劣るはずだ！ 神がそう定められたのだぞ！」

「違うな。それはお前たちが、勝手に思っているだけだ。神が決めたことでもなんでもない」

ウイリーのバカ！ こいつらにそんなことを言ったところで、通
用する筈がないし、こいつらがエルフの神を恐れるなら、そもそも
こんなことする筈がないじゃないの！

「それに、我々がお前たちに劣るなら、現状をどう説明するのかな
？ このあたりのえるふを、我々がほぼ全滅させた、その事実を？」

「そうだ、聞いてみたかった！ 答える！ 貴様らはなぜ、エルフ
と見れば皆殺しにする？！」

そう、私も聞いてみたい。なぜこいつらが、私たちエルフをそこ
まで憎むのか。

「簡単なことだよ。お前らも、えるふを喰う獣は皆殺しにするだろ
う？」

「なっ？！」

ラルフが叫び声を上げる。私も心中で叫んでいた。こんな簡単な
ことに、なぜ気づかなかったの！ 私たちがこいつらを憎むのと同
じで、こいつらが私たちを憎まない筈がないじゃない！

「その通り。我々から見れば、えるふはすべて人喰いのケダモノだ。皆殺しにして当然なのさ」

「殺すのが当然だと?! 皆殺しにされて当然だと?! 我々が!」

「そうだ、貴様らえるふにとって、人間を喰うのが当たり前なのと同じで、我々にとって、えるふは皆殺しにするのが当たり前なのだ」

「だから殺したって言うの——赤ん坊さえも!」

私たちが何を言ったところで、もう負け惜しみにしかならないし、事実こいつらは、少しも動じていない。こいつらが私たちを憎むのも、もう当然と言うしかない。しかし、赤ん坊まで皆殺しにするのは、さすがに許せなかった。

「その赤ん坊が、成長すると人喰いのケダモノになる。それが判っている以上、我々は容赦しない。容赦する理由が無いからな」

「つまり、貴様らはこう言うのか! 何者であろうと、いかなる理由があろうと、人間を食えることは絶対に許さない! 人間を食える者はすべてケダモノだと! 人間を食える者は、すべて皆殺しにする!」

「そうだ」

「『人間を食えること』そのものが悪だと言うのか!」

「そうだ。やっと気づいたようだな——。貴様らすべてに、そのことを徹底的に思い知らせてくれるわ!」

「——善悪の問題じゃないわ！ 人間を食べられなくなったら、私たちは飢え死にするしかないのよ！ あんたたちは、エルフすべてに飢え死にしろって言うの！」

「そうだ、人間を喰うくらいなら飢え死にしろ」

「グ…ギヤアアアッ！」

そいつが平然とそう言い切った時、私はわめき出さずにはいられなかった。

——駄目だ！ こいつらにとって、人間を食べることは『絶対悪』なのだ！ 『いかなる理由があろうと、絶対にしてはならない』ことなのだ！ 人間を食べねば生きられない私達エルフを、こいつらはもう、絶対に許しっこない！

「に、人間を喰うくらいなら飢え死にしろだと！ 人間を喰うくらいなら飢え死にしろだと！ 貴様、それがどういふことか解っているのか！ 我々エルフに『滅亡しろ』と言っているのと同じなのだぞ！ 『死に絶えろ』と言っているのと同じなのだぞ！」

「そうだ、何度でも言ってやる。我々は、それが何者であろうと、人間を喰うことは絶対に許さん。人間を喰うくらいなら飢え死にしろ。『人間を喰わねば生きられない』と言うのなら、そんな奴等に生きている資格は無い。さっさと滅びてしまえ。一匹残らず、死に絶えてしまえ」

「きつ、貴様ア！」

「どうせ同じことなのだから――。貴様らえるふは、遠からず滅びる運命。死に絶える運命なのだからな」

「ななな、なににい?!」

ラウルが驚いている。しかし私は、もう驚かなかった。こいつらがそうするだろうことは、もう予測できたから――。

「そうだ、われわれ大日本帝国は、すでに決意した――。人間を喰う貴様らえるふを滅ぼすと。一匹残らず根絶やしにする、とな」

「に、人間がエルフを滅ぼすだと?! 神に選ばれし我々エルフを、下等な人間が滅ぼすだと?!」

「神に選ばれし……か。思い上がりもはなはだしいな」

「何だと!!」

「しかも、自分ではそう思っていないから、なおさら始末が悪い」

「貴様ア!」

「はつきり言つてやる。お前たちは、神に選ばれしものなどではない。絶対に、そんなものでは有り得ない。ただ単純に、『今までのこの世界では、一番強かった』というだけに過ぎない」

「ただ強かつただけだと!」

「そうだ、と言っても、われわれ大日本帝国よりは、はるかに弱いかな」

「我々は、ただ強かったただけと言うのか?! 強かっただけで、高貴でもなんでも無いと言うのか?! ただ力を持っていただけで、あとは貴様ら同様の、下賤な存在だと言うのか?!」

「ちよつと違うな。お前たちは、この世界の人間よりはともかく、われわれ大日本帝国の人間よりは、遙かに下等な種族だ。無知で愚かで傲慢で見下げ果てた、クズのような種族だよ」

「え、エルフが人間より下等だと?! 貴様らが、我々より遙かに高貴な種族だと?!」

「そうだよ。さつきも言っただろう? 貴様らなど、我々から見れば、そこらのケダモノとなんら変わらぬ、下等な存在でしかない。生きている資格もない、クズでしかない」

「貴様アアアア!」

「そして、お前たちえるふは、平気で人間を、殺して喰う。ゆえに、お前たちよりも強い人間たちが、この世に現れれば、その手で滅ぼされるしか無い。今、まさにその通りになったというわけだ――。お前たちはもうすぐ滅びる。一匹残らず、死に絶えるのだ。われわれ大日本帝国の手にかかってな」

「に、人間がエルフを滅ぼすなど、出来ると思っているのか!」

「そちらこそ、虚勢や負け惜しみはいい加減にするのだな――。貴様らも、すでに見たのだろう? このあたりのえるふは、もうだいたい全滅させた。それを知ってなお、不可能だと言うのかな?」

「エルフ全体で三百万人は下らないのだぞ！　それを全滅させるなんて、出来ると思うのか！」

「大日本帝国には、一億人近い人間がいる。屈強な男だけでも、二千万人近くいるのだよ。三百万を皆殺しにすることくらい、出来ないと思うのか？」

「なっ、何！」

「もちろん時間はかかるだろうし、『一匹残らず全滅させる』のは、さすがに無理かもしれん。しかし、三百万の内二百九十万以上を殺して、『えるふという種族を滅ぼす』のは、難しくもない」

「う、嘘だ！」

「ここで死ぬお前たちに、嘘を言って何の意味が有る？——さて、無駄話は終わりだ。我らの同胞が味わった苦しみ、貴様らにも味わってもらっぞ」

「人間が味わった苦しみ？……ま、まさか？！」

「その通り、さて……」

そう言って見回す雄人——その視線が、ラウルの顔で止まった。

「まずはお前だ。貴様には『喰われて』もらっ」

「に、人間がエルフを食べると言うのか？！」

『お前たちがエルフを食べるのなら、私たちが人間を食べるのと同じじゃないの！』私は心中でそう叫んだ。しかしそうではなかった。それを聞いた雄人は、ラウルの顔を思い切り殴りつけた。

「ふざけるな！ 誰が貴様らなど食うか！ 貴様らを食うくらいなら、我々は飢え死にするわ！」

それって意趣返しのもりなの？ お前たちは、エルフを食べるくらいなら飢え死にするって――。

つまり、『エルフより、自分たちの方が上』だって言いたいのか？
『エルフはケダモノで、自分たちはケダモノじゃない』って言いたいのか？

それじゃ、『喰われてもらう』っていうのはどどういう意味よ？！

「貴様を喰う奴らは別にいる！」

そう言っただけで背後を振り返る雄人――。その視線の先にいたのは、あの狼に似た獣だった。

「そ、そいつらにラウルを喰わせるってどういうの！」

「そうだ、それも『生きたまま』な」

「なっ！ やめろ！ やめろ！ やめてくれ！ やめてくれえー！」

泣き叫ぶラウルを尻目に、雄人が手下どもに命じる。そいつらは、ラウルを縛った杭を地面から引き抜き、その場に横たえる。あの雄人が、腰に吊った剣を抜き、その刃で、ラウルの腹を一気に切り裂いた。

「グギヤアッ!!」

ラウルの腹が裂け、腸がこぼれ出る――。そこへ、あの獣もが駆け寄った。

「グギヤウワゴワグギヤガワー!!」

聞くに堪えない悲鳴、見るに堪えない光景だった。あの狼に似た獣が、まだ生きたままのラウルの内蔵を、むさぼるように喰らっていく。私とウイリーは顔をそむけたが、雄人たちは何も感じていないようで、平然と声をかけてきた。

「どうだ？ 目の前で仲間を喰われる気分は？」

「けっ、ケダモノー!!」

ウイリーがそう叫ぶが、それは当然のように、「顔をおもいきりぶん殴られる」という報復を呼ぶだけだった。

「まだ解らんのか！ 貴様らに、それを言う資格は無いことが！ 我々は全員、今の貴様らと、同じ思いをさせられたのだぞ！」

「!」

つい先ほど私が悟ったことを、ウイリーも悟らされたらしい。愕然とした顔をしている。

そうだ、その通りなのだ。ラウルを獣に喰わせたこいつらを、私

とウイリーが決して許せないのと同じで――。

「そうだ！ お前たちも、仲間を何物かに喰われたら、その相手を決して許すまい！ それと同じで、我々は、貴様らえるふが絶対に許せん！ たとえ何十年何百年かかるうが、すべて皆殺しにしてやる！」

「くくく……」

私は、呪わずにはいらなかった。こいつらを召喚した西方の者達を、初めて心底から呪った。

いったい何という、愚かなまねをしてくれたの！ 人間の原種、それもこんなにも強い連中を、一億匹近く召喚してしまうなんて！ これじゃ、私たちエルフは本当に、皆殺しにされるしかないじゃない！

悔しさと情けなさで、思わず涙がこぼれてくる――。それを見た奴等が、ニヤリと笑った。

「解ったか？ 我々が全員、どんな思いを味わったか。お前たちえるふは、もう、皆殺しにされるしかないこと、一匹残らず、死に絶えるしかないことが」

雄人たちの顔に、あの嘲笑が戻る。長の雄人は、ウイリーに近づく、その顔を覗き込んだ。

「さて、次はお前だ。我らの同胞たちの恨み、その身に受けてもら

おうか」

「ど、どういう意味だ!」

「すぐに判る」

そいつはそう言う、手下の一匹に命じる――。命じられた奴が走り去って、しばらく後――。見たことも無い着物を着た雌人たちが、7、8匹姿を現した。いずれも怒りの表情を浮かべ、柄の長い木槌のようなものを、手に持っている――。

「なんだそいつらは――。も、もしや?!」

「多分その『もしや』さ。この女たちは皆、貴様らの『牧場』で、『飼われて』いた者たちだ。彼女たちの恨み、その身に受けてもらう」

「ど、どうするつもりだ?!」

「もう解っているのじゃないか? 貴様はここで、文字通り『叩き潰される』のだ。彼女たちの手でな」

「なっ! や、やめろ! やめてくれえー!」

「そう言われてやめるはずがないことくらい、解ると思うがな」

ラウルの時と同じように、手下の雄人たちが、ワイリーを縛った杭を地面から引き抜き、その場に横たえる。その両側に、木槌を持った雌人たちが、ずらりと並んだ。

「解っていると思うが、首から上は殴るなよ。すぐに死なせるのは、あまりにも慈悲深すぎる」

「もちろんです！」

「私たちを家畜扱いしたこいつらへの恨み、父や母や兄を喰ったこいつらへの恨み、絶対に忘れません！」

「よし、やれ！」

その言葉と共に、雌人たちが一斉に、ウイリーの全身を木槌で殴り始めた。

「グギヤゴワギヤグワー！！」

「ウ、ウイリー……！」

私はもはや言葉も無く、涙を流しながら、ウイリーの最後を見つめるだけだった――。

どれだけの時間が過ぎたのか――いや、実際にはわずかな時間だったのだろう。雌人たちが疲れて殴るのをやめた時、そこに有ったのは、ぐしゃぐしゃに潰れた血まみれの肉塊だった。形が残っているのは首から上だけで、あとは文字通りの『肉』に過ぎなかった――。もちろんすでに息は無い。

ラウルはと見ると、こちらは内蔵を獣に喰いつくされ、とつくの昔に絶命していた。

「貴様らー！ ラウルに続いてウイリーまでー！」

私がそう叫んでも、

「ふん！ 貴様らえるふの罪に比べれば、これでも慈悲深すぎるくらいだ！」

「こ、これで慈悲を与えたつもりだって言うの！」

「そつだ。……さて、貴様には、最も残酷で屈辱的な目に合ってもらおうか」

「な、何？！」

そいつは私の問いには答えず、やはり手下に何かを命じる――。二匹の雄人が、細長いテーブルのようなものを運んで来た。

「降ろせ」

その言葉に手下どもが、縛り付けてあった杭から、私を降ろす――。私は抵抗しようとしたが、手足を縛った綱まではほどかれなかった上、元々雄人たちの力にかなうはずもなく、どうにもならない。

なすすべも無く、あのテーブルの上に、再び縛り付けられるしかなかった。それもおそろしく嚴重に。

「こんなに嚴重に縛って、私をどうするつもりなのー？！」

その言葉に、あの雄人がニヤリと笑う。すると、いつのまにかその背後に控えていた、別の雄人が二匹進み出た。どちらも頭と顔を

白い布で覆い、分厚い一枚布で身体の前を覆う、見たことも無い格好をしている。

「この二人、いったい何者だと思う？」

「私に判るわけないわよ！」

「この二人は、大日本帝国の食肉業者なのだよ」

「な、何ー?!」

「そう、家畜の死体をばらして肉にする。それを仕事にしている者たちなのだ」

「ま、まさか?!」

「そのまさかだよ。これからこの二人に、貴様を肉としてさばいてもらう。もちろん生きたままだな」

「なっ、やっ、やめろー！ やめてー！ やめてえ！」

「お前たち、解っていると思うが、できるだけ死ぬ時期が遅くなるようにするのだぞ」

「わかってまさあ。可能な限り、苦しみを長引かせてやりますあ」

「さて、まずは生きたまま、全身の皮を剥いでやりますか」

な、なんて奴らなの、こいつらー！ ほんの少しでも同情した、私が馬鹿だった！ エルフは少なくとも、人間を生きたまま食べたりはしなかった！ 生きたままの人間を、肉としてさばいたりはしなかった！ いったいどこまで凶暴なの！ どこまで残酷なの！ こいつらは！ こいつらはあ！ グギヤアアー！！

「ぎゃああー いまにみでいろー ぎつどでんばづがぐだるぞー」

「ふん、いくらでも負け惜しみを言うがいい。天罰が下るのは貴様らの方だ」

生きながら肉屋にさばかれていくエルブレイを、あの年長の男——大日本帝国陸軍少佐・田原健人は、そう言っただけで冷ややかに見つめた。

「こいつらを根絶やしにできる日が、一日も早く来て欲しいものだ」

ラウルは生きながら犬に喰われ、ウイリーは全身を叩き潰され、エルブレイは、生きたまま肉としてさばかれた。エルフにとっては高名な冒険者、種族を救うきっかけを作った英雄たちの——大日本帝国にとっては、傲慢な人食いのケダモノ三匹の——これが末路であった。

だが、エルブレイの認識も、田原少佐の認識も、実のところ誤っていた。大日本帝国に天罰が下ることは無かった。

エルフが死に絶えることは無かった。

しかしエルフ達にとって、それは本当に、「滅亡は免れた」とい

うだけのことであった。

大日本帝国の男たちが、いつの頃からか考えを変えたのである。「こいつらを殺すのはもったいない。それよりも、自分たちのなくさみものにした方がいい」と。

この日から二十数年後、「野生の」エルフは、文字通り「一匹残らず」根絶やしにされた。人間に捕らえられたもの以外、すべて完全に、この世から消えた。

見つけ次第殺されるか捕獲された上、「人間という家畜」を失つて、もはや生きるすべが無かったのである。

捕らえられたエルフは、そのすべてが、ありとあらゆる尊厳を奪われ、獣に落とされた。

服を着ることも許されず、舌を切られてしゃべることもできない獣とされ、人間たちに「飼われる」ことになった。

ちなみに、文字の書けるエルフは、言葉を完全に奪うため、両手を手首から、両足を膝から切り落とされ、四つん這いでしか歩けない身体にされたという。

エルフ——人間を喰うことを当然と考えた、傲慢で愚かで独善的な種族は、大日本帝国という「別の独善」により、実質的に滅ぼされ、獣に落とされた。

大日本帝国の、軍の慰安婦代わり。大日本帝国の、金持ちの男のなくさみもの。それが「エルフという家畜」に与えられた役目だった。

家畜にするために呼び寄せた相手に、逆に自分たちの方が家畜にされてしまうとは、なんという皮肉な運命だろうか。

そして、エルフが「人間より下位の立場から抜け出すこと」は、二度と無かった。

「再び人間より上に立つこと」は、それこそ永遠に無かった。

単に「獣」という立場、「家畜」という立場から抜け出すのにさえ、それから二百年を要することになる――。

02「if編——『絶滅』——」（前書き）

これはif編です。本編のエルフは、かろうじて生き残りました。大日本帝国の男たちが、途中で考えを変えたために。

しかし、大日本帝国側の考えが変わらなかったらどうなったか？ エルフへの怒りと憎しみが、最後までまったく解けなかったらどうだったか？

その場合、この世界のエルフがたどった筈の、悲惨極まる末路を讀んでみてください。

『人喰いエルフ』たちにとってこれ以上有り得ない、最悪の運命を讀んでみてください。

02「if編——『絶滅』——」

「どうだ、見つかったか?!」

「駄目だ、どこを探しても見つからん!」

「よく探せ! まだ遠くへは行っていない! このあたりに隠れているのは間違いないんだ!」

大日本帝国の雄人たちの、叫び声を聞きながら、私と姉は——
赤ん坊を抱いた姉は——茂みの中で身を縮めるしかなかった。

私たちが、大日本帝国の手を逃れて逃げ回るようになってから、
いったいどれくらいたつのだろうか? 4ゝ5年? 7ゝ8年? それとももう、10年以上もたっているのだろうか?

エルフと見れば、問答無用で皆殺しにする大日本帝国。神がエルフに与えた力である魔法が、ろくに通じない大日本帝国。

奴らがこの世界にやって来るまでは、まさかここまで酷いことになるなんて、思ってもみなかった。私たちがこんなみじめな境遇に追い込まれるなんて、エルフが人間を恐れて逃げ回る羽目になるなんて、想像も出来なかった。

大日本帝国——その名を初めて聞いたのは、聖暦6000年の初夏。西方から流れて来た、噂としてだった。

曰く、「西方で召喚された人間の原種たちが、西方州に攻め込んで来た」「そいつらは恐ろしく凶暴で、エルフと見れば皆殺しにす

る」「魔法で対抗しようにも、エルフの魔法より強力な魔法を使う」「そいつらのせいで、西方州が事実上滅ぼされた」と。

最初はただの噂で、当然信じる者は、ほとんどいなかった。そんなに強い人間なんて、魔法を使える人間なんて、あまりにも眉唾過ぎたから。

しかし、「噂の真偽を確かめに行った者が、誰一人戻って来なかったこと」「実際に西方から逃げて来た者が、何十人か東方に現れたこと」で、信じざるを得なくなった。

西方のエルフたちが、凶暴な人間の原種を召喚してしまったことを。そいつらは強大な力を持ち、そのせいで西方州が悲惨な状況になっっていることを。

王も含めて戦慄した私たちは、そいつらに向け可能な限りの備えをすることになった。しかし、西方から逃げて来た者の話によれば、大日本帝国には、その程度ではまったく通用しないと言う。なにしろ3万の軍を1日で全滅させ、西方州の州都を、たった3日で滅ぼしたと言うのだから。

そのすべてを信じたわけではないが、最悪の場合、町を捨てて逃げるしか無いと、覚悟を決めるしか無かった。

ところが、待てど暮らせど、大日本帝国は東方へ攻めて来ない。誰もが首をひねっている内に、10年以上の月日が過ぎてしまう。当然の結果として、こんな事を言う者も少なくなかった。

「大日本帝国は、西方州を手に入れただけで満足したのだろう」「人間でありながらエルフを皆殺しにするという大罪を犯したため、天罰を受けたのだろう」と。

しかし、それは早計だった。奴らはただ「攻め込む準備に時間がかかった」だけだったのだ。

聖暦6013年、5月。大日本帝国は、本気で東方へと攻め寄せて来た。やつらの船から放たれる攻撃に、州都を初め、沿岸部の町はたちまち壊滅した。内陸の町も、やつらが操る怪鳥の攻撃で、次々に廢墟と化した。我々の軍勢が、やつらの軍勢に何度挑んでも、ことごとく全滅させられるだけだった。

私たちは、これ以上有り得ないくらい思い知らされた。十数年前の噂が、少しも誇張ではなかったことを。大日本帝国の軍勢には、エルフの軍勢はまったく齒が立たないことを。エルフに神が与えた力である魔法さえ、やつらにはさっぱり通用しないことを。

王とその側近たちは、最初の日で戦死。他の有力者たちも、次々と戦死するに及んで、私たちは、残された唯一の道を取るしかなかった。戦うのを諦めて、逃げ出すしかなかった。町や牧場を捨てて、森や山中へと向かうしか無かった。

その際、飼っていた人間は、ごく一部を除いて手放すしかなかった。牧場など作れば、「見つけてください」と言っているようなものだったから。

実際諦めきれず、牧場の人間を連れ出して、別な場所で牧場を作ろうとした者も居たらしい。でも、彼女たちはすべて、早々に見つけ出されて殺されたという。結局は無駄な足掻きだったということだ。

私たちエルフは、人間という家畜を、自ら手放すしかなかった。

大日本帝国に殺されないためには、そうするしかなかった。結果として奴らは、食物の大半を、私たちから奪っていったのだ！！

生き残ったすべてのエルフは、『人間という家畜を、神から与えられる前』の生活に戻るしかなかった。木の実を取ったり、動物を魔法で倒したりして食べる生活に戻るしか無かった。

当然、そんな生活で、十分な食物が得られる筈もない。飢えと、そこから来る病気で、仲間はずつと死んでいった。

老いた祖母は、「乳製品が食べたい」と言つて、まだ子供だった妹は、「人間が食べたい」と言つて、それぞれ飢えて死んでいった。痩せ衰え、ひもじい思いをかかえて死んでいった――。

誰もが大日本帝国を呪つたが、戦つても無駄で、しかも無意味だった。そんなことをしても犬死にするだけ、命を粗末にするだけなのが、明らかだったから。

それでも、大日本帝国が私たちを放つておいてくれたなら、まだしも希望が有ったかもしれない。しかし奴らは、恐ろしいほどの執拗さで追つて来た。他の者を逃がすために、犠牲になった仲間も少なくなかった。奴らは本当に、私たちエルフを完全に滅ぼすまで、やめる気は無いようだった。

大日本帝国がなぜ、私たちをそこまで憎むのか、やつらに一度聞いてみたかった。とはいえ、そんなことを考えても、意味が無いのも確かだった。やつらが私たちよりずっと強いこと、私たちを本気で根絶やしにするつもりでいることを考えれば、やつらに見つけることは、よほど運が良くない限り死を意味する。やつらがなぜそう

するのかなど、それに比べれば大したことではなかった。

そして今、ここにいるのは、私と姉と、姉に抱かれたその赤ん坊だけだ。逃げ回る内に、仲間は次から次へと死んでいき、最後に残った三人とも、今朝逃げ回るうちにはぐれてしまった。

いったい今、この世にエルフは、何人生き残っているのだろうか？ 10万人？ 1万人？ ひよっとしたらもう、千人も生きていないかもしれない。私たちはもう何年も、仲間以外のエルフと出会ったことが無かった。

——そんなどうしようもないことを考えながら、茂みに身を潜めていた私の耳に、突然パチパチという音が聞こえてきた。驚いて顔を上げると、さほど遠くない場所に、ちらほらと紅いものが見える。

「冗談ではない！ 奴ら、私たちをいぶし出すために、辺りに火を放ったのだ！ 奴ら、そこまでするといのか！ たった数人のエルフを殺すために、森を焼き尽くすことも辞さないというのか！ 大日本帝国の憎しみの深さを、私たちを滅ぼすことへの執念の凄さを、改めて見せつけられた思いだった。

ここに居れば焼け死ぬしかない。見つかる危険を承知で、逃げ出すしかない。姉の手を引いて、私は茂みから飛び出した。

そのまま、炎とは反対の方向へと駆け出す。頭の隅を、ちらと「畏かもしれない」という考えがよぎったが、だとしても選択の余地は無い。炎に焼かれて死ぬわけにはいかない以上、火の手の無い方向へと逃げるしかない。

それに、待ち伏せしているとしても、一箇所にいる敵はさほど多くはないはずだ。私たちの魔法が奴らの包囲を食い破ることを、甘

いと判つていても願うしかなかった。

しかし、やはり甘かった。突然近くで爆発が起こり、私たち3人を吹き飛ばした。姉の手から離れた赤ん坊が地面に叩き付けられ、けたたましい声で泣き出す。

さほど遠くない木陰から、数匹の雄人が姿を現すのが見えた。姉がそれに向け杖を振り上げるが、次の瞬間その身体は、何か目に見えぬ力で、思い切りはじき飛ばされた。倒れたその姿に私が駆け寄った時、姉は全身のいたるところから血を噴き出し、すでに事切れていた。

姉を殺したらしい雄人に向け、私も杖を振り上げる――。だが次の瞬間、私は右腕に激痛を感じ、杖を取り落とした。見ると右腕に穴が開き、血が噴き出している。――それに驚く間も無く、今度は左の太ももに、何かを突き刺されたような衝撃と激痛を感じた。立っていられず、その場にくずおれる――。自由になる左手で杖を拾い上げようとするが、その前に、やはり目に見えない何かが、杖を遠くへはじき飛ばした。

大日本帝国のしるしである、あのカーキ色の服。それを着た雄人が数匹、油断の無い仕草で武器を構え、私に駆け寄って来る。

一匹が私に武器を突き付け、別の一匹が、まだ泣いている姪に近づく。どうするつもりかと、思わず見つめると、そいつは躊躇することなく、槍先で姪の身体を貫いた。

思わず私の顔が歪む。こいつらは、エルフと見れば赤ん坊でも容赦無く殺すとは聞いていた。しかし実際にそれを見たのは、これが初めてだった。噂に聞く「大日本帝国の凶暴さ・残忍さ」を間近で

見せつけられ、私は思わず叫び出していた。

「あんたたち！ そんなに私たちエルフが憎いの？！」

「ああ、憎いとも。貴様らすべて、赤ん坊まで八つ裂きにしても、まだ足りないくらいな」

私に武器を突き付けている雄人が答える。

「なぜそんなに私たちを憎むのよ？！ 私たちをなぜ、皆殺しにするのよ？！」

長年の疑問をぶつける私に、そいつは顔を歪めて言った。

「……なぜ憎いかだと？ なぜ皆殺しにするかだと？ 解らないなら教えてやる！ 貴様らえるふが、人間を喰うからだ！」

「人間を食べるから？！！ ただそれだけの理由で、私たちを皆殺しにするって言うの？！！」

「ただそれだけだと………充分過ぎるほどの理由だ！！」

「なぜ？！！」

「貴様らは大抵そう言うな。………」
『自分にとって当たり前のことには疑問を持たない』それは人間もえるふも同じのようだな」

「どういう意味よ？！」

「なぜ想像してみない？ 我々とお前たちの立場が逆なら、どうだ

ったかと」

「……………！！！」

その言葉に、私は愕然となった。

「そうだ、我々人間が、えるふを常食とする種族だったら、やはりお前たちも、我々を滅ぼそうとしただろう。お前の家族や友人が、何者かに喰われたら、お前はそいつを心の底から憎んだだろう。決して許そうとはしなかっただろう。そうは思わないか？」

言いたいことは解る。でもそんな理屈、受け入れてたまるもんか！　そうだ！！　それに、それは、人間とエルフが対等の場合のみ成り立つ理屈だ！　そんなことがあつてたまるか！！　人間がエルフと対等だなんて！

「……………エルフと人間と一緒にしないで！！　人間を食べることは、神が私たちエルフに許したもうた、神聖な権利なのよ！！　神が許したもうたことを人間が禁じるなんて、許されると思うの！！」

「ほう？　つまりお前たちはこう言うのか？　『えるふが人間を殺して喰うのは、許されて当然。人間がえるふを殺すのは、許されなくて当然』だと？」

「当たり前よ！　神がそう定められたんだもの！　人間は、エルフのためにこの世に存在するんだもの！　人間とはエルフのための生き物、家畜として、神がエルフに与えた生き物なんだもの！　神がエルフを創造された時、エルフになれなかった出来損ない、それが人間なんだもの！　人間がエルフを殺すなんて！　許されるはずがない！　人間がエルフと対等になろうとするなんて！　神が許すは

「ずがない！」

「『神が定めた』だと？ ハッ、馬鹿馬鹿しい」

「なんですって！」

「はつきり言つてやる。その『神が定めた』とやらは、お前たちの先祖の捏造だ」

「ネツゾウ？」

「『でっち上げ』ということさ」

「で、でっち上げ？！ 神の教えが、私たちの先祖のでっち上げ？！」

「そうだよ。お前たちの言う『人間を食べることを、神がえるふに許したもうた』とやらも、『人間はえるふのための存在』とやらも、すべてでっち上げた。お前たちの先祖が、自分たちに都合のいいよう、でっち上げたものに過ぎんよ。それについては、首を賭けてもいい」

「あんたの首なんかもらったって嬉しくないわよ！ 私は信じない——神の教えが先祖のでっち上げだったなんて、絶対に信じない！！」

「だろうな——さて、無駄話は終わりだ。朝の3匹も含め、貴様の仲間は今すべて殺した。貴様もここで死んでもらうぞ」

「『すべて殺した』ですって！ 姉と姪だけでなく、ルーファもエ

ラモタファイも、すべて殺したですって！」

「ほう、この女と赤ん坊、貴様の姉と姪だったのか。目の前で家族を殺されるとは、いささか不憫だな」

露骨な嘲笑を浮かべて言うそいつに、私の中で何かが切れた――
|。

――わけのわからぬ叫びと共に、エルフの女が、大日本帝国の男に襲いかかる。いや、襲いかかるうとする。しかし所詮は、無駄な足掻きに過ぎなかった。次の瞬間、銃剣に心臓を貫かれ、女の身体はその場に崩れ落ちた。

二度、三度とけいれんを繰り返し、すぐに動かなくなる――。
それを冷やかな目で見ながら、男は『念のために』と言うように、女の首を切り落とした。すでに死んでいた赤ん坊と母親の首も、念のために切り落とす。それを見た部下の一人が、呻くように言った。

「しかし軍曹殿、人喰いとはいえ女子供を殺すのは、なにか悪いことをしているような気分になりますね」

「その気持ちは解るが、しかし間違えてはならんぞ――。誰でも知っている筈だ。女子供の姿をしていても、こいつらは人喰いの悪鬼なんだ――。鬼畜米英どころじゃない。人間を殺して喰うことをなんとも思わない、真正正銘の鬼畜なんだ。こいつらは何としても、根絶やしにせねばならん。たとえ一匹でも生き残らせたら、こいつらに喰われた、我らの同胞が浮かばれん」

「解っています」

「さあ、さつさと帰るぞ。今日は久しぶりだったが、次もそうだと
は限らん。最近は見つかること自体珍しくなったとはいえ、明日ま
たえるふが現れんとも限らんからな」

「はい！」

去って行く大日本帝国の兵士たち——。彼らは知らなかった。
いや、この世界の誰一人、永遠にそれを知ることには無かった。

皇紀2625年10月16日。この日、一つの種が『絶滅』した
ことを。この世界で生まれたエルフ達が、すべて完全に死に絶えた
ことを。『日本』と一緒に別の世界に飛ばされたエルフ達も、とっ
くの昔に皆殺しにされていることを。この世界でエルフが生きて見
つかることは、もう永遠に無いことを。

エルフの歴史は、この時終わった。

『この世界最大の大陸を、6000年にわたって支配し続けた種族』
の、これが末路であった。

『自分たちよりもずっと強力で、なおかつ自分たちとは相容れるこ
との出来ない存在』を、自分たちの世界に呼び込んでしまった、「
愚かで傲慢で独善的で、なおかつ不運で哀れな種族」の、これが終
焉であった。

この日、この世界最大の大陸は、名実共に、大日本帝国のものと
なった。

完全に、人間のものとなった。

03「過去から来たエルフ」

「う……ん……」

私の意識は、徐々に目覚めていった。いったいどうしたのだろうか？——そうだ、森で生物相の調査をしていて、いきなりの雷雨に遭遇し——雨宿りをしていたら、すぐそばに落雷したのだった。

私の名はマイラ・セムユート・サーワン。東方ではそれなりに、名を知られた博物学者だ。今日はフィールドワークのため、単身山中の森に分け入って——とんだ災難に遭遇したというわけだ。

目を開け、身体を起こしてすぐ、私は何かしら違和感を感じる——。すぐには解らなかったが、意識がはつきりすると共に、その正体に気づいた——。これはどういうことだ！ 私が居たのは、山間の森だったはずだ！ ここは森には違いないが、周囲をいくら見回しても、山の斜面も稜線も見えない！ しかもよく見れば、植物相も微妙に異なっているではないか！

何者かが、気を失った私を、ここまで運んで来たというのか？だとしたらいったい誰が？ 何のために？ 混乱した私は、とにかくここがどこなのかを確かめるべく、近くの木に登ってみることにした。森での調査など日常の私にとって、この程度はべつに何でもない——。

途中まで登ったところで、切羽詰まっていた私の気は、あっさりと抜けた。——なんだ！ ここは平地の森だが、そのはずれに近く、しかも里に近かったのだ——。さして離れてもいない場所に結構大きな町が見える。なんだか、気追い込んでいた私が馬鹿みた

いだった。無論、有り難いことには違いなかったが。

森の下生えをかき分け、開けた場所に出る——そこで私は、いきなり予想外のものに遭遇した。

奇妙な、見たことも無い衣装をまとった雄人が二匹、そこに立っていた——。人間が服を着ているのもおかしいが、さらに驚くべき事に、こいつらは戒めの首輪を着けていない——。誰だ！人間から戒めの首輪を外すなどという、馬鹿をしでかしたのは！この町のことは知らないが、役所に急ぎ報告せねば！

そう思い激昂する私を、雄人どもは当惑の目で見ていた。

「何だこいつ？　もしかして野良エルフか？　なんで裸じゃないんだ？」

「どこから逃げ出した奴じゃないのか？　盗んだ服を着てるんじゃないのか？」

何だこいつら？　いったい何を言っている？　どうなっているのか、さっぱりわけが解らん——。いや、判ることもある。どうもこいつらは、エルフである私に、敬意も恐れもまったく抱いていないようだ。それどころか、見下しているようにすら感じる。

馬鹿な！　人間はエルフを恐れ、敬うはずだ！　人間がエルフを敬わず、恐れもしないなどということは、有り得ないはずだ！　人間がエルフを見下すなどということは、有ってはならないはずだ！　許されてはならないはずだ！

よし、賤だ！　馬鹿な飼い主に代わって、私がこいつらを賤けてやる！　私たちを恐れ敬うよう、徹底的に調教してやる！　エルフ

への恐れと敬意を、その身体にたつぷり叩き込んでやる！

杖を取り出し呪文を唱える私に、雄人どもが眉をひそめる。――戸惑っているようだが見ているよ。貴様らは、これから私の魔法で吹っ飛ばされるのだ。殺しはしないが、たつぷりと痛い目に合わせてやる。貴様らがこれから、エルフを恐れ敬うようにな――。

呪文を唱え終える寸前、雄人の一匹が、片手を素早く動かすのが見えた。何かするつもりのようなだが、すでに手遅れだ。後は、杖を振り下ろすだけなのだから――。ギャアツ！！

その瞬間、大きな破裂音が響いた。それに驚くと共に、私は右腕に激痛を感じる――。思わず杖を取り落とし、左手でそこを押さえた。見ると指の間から、血が流れ出している。

馬鹿な！ いったい何が起こったのだ！ 雄人を見ると、片手に何か奇妙な物を持ち、その先を私に向けている。

どういうことだ！ いや考えている暇は無い！ もう一度魔法を使うため、杖を拾い上げようとして――再びの破裂音と共に、今度は両足に激痛を感じた。

立っていられず、その場に倒れ込む――。なんとか杖を拾い上げたものの、その時はもう遅かった。もう一匹の雄人が、素早く私に駆け寄り、その巨体で私を押さえ込んだのだ。

「は、離せ！」 無駄と知りつつ叫ぶ私。

「なんだ？ お前しゃべれるのか？」

「エルフがしゃべるのは当たり前だろう！ 貴様ら！ 人間がエルフにこんなことをして、ただで済むと思っているのか！」

「はあ？ 何を言っている？」

「そちらこそ、いったい何を言っているんだ！ さつきから、わけのわからないことばかり！」

「おい、こいつは野良エルフじゃないぞ」 奇妙な物体を持った雄人が、この時口を挟んできた。

「野良エルフじゃない？ じゃあ何だ？」

「『野生の』エルフだ。まず間違いないと思う」

「野生のエルフだって？！ 何言ってるんだ！ そんなもの、もう十年以上見つかっていないじゃないか？！ それもこんな町の近くで！」

「それじゃ、どう説明するんだよ？ こいつが口をきけることを。それに、お前も見ただろう？ こいつが何かやろうとしたのを——。あれは、『魔法』を使おうとしたんじゃないのか？」

「『魔法』？ おい、それじゃ、俺たちって……」

「ああ、危なかったんだ……。まあこいつにとっては、運が悪かったわけだな。よりによって、この俺に喧嘩を売っちゃうなんてな」

「……まあ、町でも3本の指に入る、射撃の名手が相手じゃな」

「貴様ら、いつまでわけのわからんことを言っている！」

じれた私は、雄人どもを怒鳴りつけた。

「お前こそ、何をわけのわからんことを言っているんだ。だいたい、野生のエルフは、人間を見れば逃げ出すもんじゃないのか？」

「なぜエルフが人間を恐れねばならん！ 貴様らこそ、尻尾を巻いて逃げたほうがいいぞ？　すぐ町から、別のエルフがやって来る筈だからな」

これははったりではなく、強がりでもなかった。実際この時は、私はまだ余裕があったのだ。人間がエルフにこんなことをして、ただで済む筈がないし、さっきの破裂音は、町にも聞こえている筈だ。きっと誰かが助けに来てくれる。私を救うと共に、こいつらに鉄槌を下してくれる筈だ――。そう思っていたのだった。

ところが驚いたことに、私の言葉を聞いても、こいつらはいつこくにひるむ様子も無かった。

「――話にならん。まあいい、これから貴様を警察へ連れて行く。野生のエルフを見つけたら軍が警察に通報するのが、我々大本帝国臣民の義務だからな」

「ケイサツ？　ダイニホンテイコク？　何だそれは？」

聞き慣れない言葉に、私は心中で首をひねった。傷の痛みに耐えながら問うと、意外にもこいつらの方が、怪訝そうに顔を見合わせる。一匹が、呆れた表情で言い出した。

「馬鹿なことを言っな。まさかエルフのくせに、大日本帝国を知らんとは言わさんぞ」

「そんなもの、聞いたことも無い！ 第一どういうことだ！ さっきから聞いていると、まるで人間の方がエルフより偉いと言わんばかりだぞ！」

「…もしかしてお前、本当に知らんのか？ 大日本帝国が、エルフを事実上滅ぼしたことも？ 今では本当に、人間の方がエルフより偉いことも？」

「ななな、なにい？！ そそそ、そんな馬鹿な？！」

「——今までいったい、どんな生活をしてきたんだ」

そう言っため息をつく雄人——。その様子は、演技にもはったりにも見えない。余計わけがわからず、私は混乱するばかりだった。

——それからの時間は、私にとって屈辱のそれだった。持ち物をすべて取り上げられ、衣服をすべてはぎ取られる。傷の手当てだけはされたものの、そのやり方はお世辞にも丁寧とは言えなかった。

自分の持っていたロープで、自分が縛り上げられるという、さらなる屈辱を味わわれ——。そのまま雄人どもにかつがれて、私は町に運ばれたのだが、町の様子は、あまりにも意外で、なおかつ信じ難いものだった。なにしろエルフがないのだ——。

町並みそのものもまったく見慣れないものだったが、歩いている

のは人間、それも戒めの首輪を着けていない人間ばかりで、エルフの姿は全く見えない。

私は、自分の目が信じられなかった――。馬鹿な！家畜化されていない、原種の人間がこの世に存在するなど！そいつらがこんな町を作って、エルフを恐れもせずのうのと暮らしているなど！しかし、何度見直してみても、目の前の光景が変わる筈もない。私は、自分がとんでもない勘違いをしていたことを知った。それと共に、絶望が押し寄せて来るのを感じた。

「大日本帝国が、エルフを事実上滅ぼした」「今では本当に、人間の方がエルフより偉い」雄人どもの言葉を信じたわけではなかったが、少なくとも私個人については、状況はもはや絶望的だった。

この町は、人間原種どもの町だったのだ！こいつらはおそらく、エルフに対抗できるだけの力を持っているのだ！ここには、私を助けてくれる者はいないのだ！魔法を使う手段を奪われ、歩くのもままならないほどの怪我をして、私が自力で逃げ出せる可能性は、もうまったく無い。誰かが助けてくれる可能性も、おそらくもう無い。

絶望にうちひしがれる私を、雄人どもは、大きな石造りの建物に運び込む。――きつとここが、やつらの言う「ケイサツ」なのだろう。縛り上げたままの私を部屋の隅に転がして、やつらは、出て来た別の雄人と話を始めた。

「――念のために聞きますけど、取り調べが終わったら、俺たちに引き渡して貰えるんですよね？」

「ああ、『野生の』エルフは、捕らえた者に所有権があるのは、君

たちも知っているだろう。多分数日後には引き渡せると思う」

「ありがたい。それじゃ、どこかの金持ちにでも売り飛ばすとした
すか」

絶望していた私だが、その言葉に、魂が炎を吹き上げた。

「貴様ら！ 私を売り飛ばすと言うのか！」

「ああ、お前ならかなりいい値で売れるだろうしな」

「に、人間がエルフを売るというのか！ 下等な人間が、高貴なる
エルフを売るというのか！」

この言葉に、新しく出て来た方の雄人が、顔色を変える――。

つかつかと歩いて来ると、いきなり私の腹を蹴り飛ばした。

「ゲギヤッ！ ゲホッ！」

思わず、無様な呻き声を上げてしまう。明らかな侮蔑の態度で私
を見下ろしながら、そいつは言った。

「そちらこそ、言葉に気をつけるのだな。次に我々を侮辱したら、
この程度では済まんぞ」

「く……うつ……」

屈辱に身を震わせる私。それを見たそいつが、露骨な嘲笑を浮か
べる。

「一つ教えてやる。大日本帝国では、人間がエルフを売り買いするのは、ごく当たり前なのだ」

「なっ、何い?!」

「大日本帝国においては、エルフの方が人間の家畜なのだからな」

それを聞いた時、この日最大の衝撃が私を襲った。誇張でなく、脳天をハンマーで割られたような衝撃だった。

「う……………嘘だ!」

やっとの思いで、その一言を絞り出す。しかし――。

「貴様にとって残念ながら、嘘でもなんでもない。後で、その証拠を見せてやる」

縛り上げられた私を、さらに椅子に縛り付け、そいつは横柄な態度で、その前に腰掛ける。その背後には、別の雄人が二匹従っていた。

「さて、と…………まず、貴様が何者かから聞かせてもらおうか」

「…名前は、マイラ・セムユート・サーワン。博物学者だ」

もうこうなったら、最後まで虚勢を張りつづけるしかない。無様な醜態だけは見せまいと、私は心中で誓っていた。

「学者だと？」

「おかしいか！ これでも、東方では結構名を知られている！」

そいつのいぶかしげな態度に、私は声を荒げた。

「……いや、作今の状況で、よくまあ、学者などやっていられたものだと思つてな」

「……どういう意味だ？」

「我々大日本帝国から逃げ回りながら、よくぞ研究を続けられたものだ、と言っているのだが」

「私は、人間から逃げたことなど無い！ そもそも、ダイニホンテイコクなどという言葉を聞くのも、今日が初めてだ！」

「そんなはずはない！ 大日本帝国がこの世界にやって来て、すでに四十年近く。エルフを事実上滅ぼして、もう十年以上たっているのだ。どういつつもりでそんな嘘をつくのか知らないが、無意味なことはやめるのだな」

「——待ってくれ！ 今なんと言った？！ この世界にやって来た、だと？！」

「そうだ。そもそもお前たちが、我々をこの世界に連れて来たのではないか」

「知らん！ 私はそんなこと、聞いたことも無い！ 第一我々が、何のためにそんなことをせねばならん？！」

「捕らえたエルフから聞き出したところでは、我々を家畜にするためにそうしたらしい。もつともその結果は、自業自得の極致で、なおかつ皮肉の極致だったがな。家畜にするために召喚した相手に、自分たちが滅ぼされ、生き残った者はすべて、我々の家畜にされてしまったのだからな」

「馬鹿な！ そんなことが有ったら、私が聞いていない筈がないぞ！」

「だから、無益な嘘をつくと言っている」

「そう、お前たちの言う通りなら、こんな嘘をついても無益だ！ 無意味だ！ 私も学者の端くれである以上、それくらいは解る！」

「ほう、それでは、我々の方が嘘をついているというのか？ だとしたら、貴様の言葉をそっくり返すことになる。我々がお前にこんな嘘をついても、何の益も何の意味も無いだろう？」

「だとしたらどういうことだ！ 私は今朝まで、住んでいた町で普通に暮らしていたのだぞ！」

「それこそ嘘もいいところだ。エルフの町など、少なくともこの大陸には、一つも残っていない筈だ。我々がすべて潰し、滅ぼしたのだからな」

「馬鹿な！ そんなことは有り得ん！ どういうことだ！」

「だからいい加減、嘘をつくのはやめろ。あまり我々を愚弄するようなら、こちらもあるぞ」

「愚弄してなどいない！ 確かに今朝まで、私はレンナウの町で、普通に暮らしていたのだ！」

「レンナウ？ どこに有る町だ、それは？」

「東方州の州都から……西に半日ほど行ったところだ」

「東方州？ 何を言っている、ここは貴様らの言う西方州だぞ？」

「何?!」

「西方州の州都が有った場所から、南東にいくらか下ったところだ」

「そんな！ 私は気絶している間に、西方州まで運ばれたというのか?!」

「何だと？」

「私はレンナウ近くの山中で、落雷に遭って気を失ったのだ。そして気がついたら、この近くの森に倒れていたのだ。誰かが気を失った私を、西方州まで運んで来たというのか? …………… いや、待ってくれ！ 教えてくれ、今日は何月の何日だ？」

「9月22日だが？」

9月22日?! そんな！ 何日もたっているかと思ったら、逆に日付がさかのぼっているではないか?! あの森にいた時は、10月6日だったはずだ。いや待て、そんな、まさかと思うが――
|。

「——つかぬことを聞くが、今年は、聖暦の何年だ？　5970年か？」

まさか一年近くたっているとは、思いたくないが——。

「セイレキ？　ああ、お前たちが使っていた年号だったな——。おい待て！　5970年どころか、聖暦6000年が、皇紀2601年だから——今年は、6039年ということになるぞ？！」

「ろ、6039年？！——。そんな馬鹿な！　私は、七十年後に来てしまったと言うのか？！」

「七十年後？」

「落雷で気を失ったのは、5969年10月6日のことだったのだ。それなのに今は、6039年9月22日だと言うのか？！」

「……つまりお前は、七十年前の東方州から、現在の西方州に来てしまったと言うのか？……とてもじゃないが信じられんな」

「私だって信じられん！……しかしそうだとすると、すべて説明がつく。私の記憶と、お前たちの言葉の、両方が本当でおかしくない。——おい、それでは、私たちエルフは、あれから六十年たらずで滅びてしまったというのか！」

「そうだ。エルフの大半は我々の手で殺され、殺されなかった者もほとんどが、飢えと病で死んだ。せいぜい数万匹が、我々の家畜として生き延びたに過ぎん」

「嘘だ！ そんなことは有り得ない！」

「なぜ有り得ないのかな？」

「神が許さないからだ！ 人間はエルフより劣る存在と、神に定められているからだ！ 人間はエルフに、一時的な勝利は収め得るだろう。しかし、最後に勝つのは必ずエルフの筈だ！ ましてや、エルフが人間に滅ぼされるなどということは有り得ない！ エルフが人間の家畜にされるなどということは有り得ない！ そんなことを神が許す筈がない！」

「貴様もそう言うのか……。ま、エルフは皆そうだったがな」

「どういう意味だ！ それは！」

「お前のい言ったことが、間違っているということだ。お前ももうすぐ、我々に屈服するということだ。……さっき言った筈だ。『今ではエルフの方が我々の家畜である』その証拠を見せてやると」

「なっ……………」

「さあ、見るがいい。両の目をよく見開いてな」

そう言って、背後の扉に目をやるそいつ。——どうやら、外で待ち構えていたらしい。開かれた扉から入って来たのは——鎖に繋がれた、二人のエルフだった！

二人とも、鎖付き首輪を着けただけの、素っ裸である。——それだけではない。内一人は、両手を手首から、両脚を膝から切り落とされ、四つんばいでしか歩けないようだった。どちらも悲しげな

表情で、私を見つめている――。

家畜か奴隷以外の何物でもない姿を見せつけられ、絶句するしかない私。――そんな私に、あいつが勝ち誇ったように言った。

「どうだ？　ここにいるのはこの二匹だけだが、貴様が望むなら何匹でも見せてやるぞ？」

そう言うそいつをキツとにらむと、私は二人に向け叫んだ。

「あなたたち！　今の話を聞いていたのだろうか？　こいつの言ったことは本当なのか？！　本当に私たちエルフは、こいつらに滅ぼされたのか？！」

二人が力なく頷くを見て、私の身体に戦慄が走った。

「そんな！　本当なのか？！　今では本当に、私たちの方がこいつらの家畜なのか？！」

二人が再び頷く。

「馬鹿な！　なぜそんなことになった？！　教えてくれ！　いったいなぜ、そんなことになったのだ？！」

「無駄だよ。そいつらは口がきけん」

「何い？！」

「舌を切つて、口がきけないようにしてある。家畜が人の言葉をしゃべるなんて、おぞましいからな」

「…待て！ それでは、手足を切り落としたのも……」

「そうだ。その女は、文字が書けるというのでな。家畜が言葉を持つなどということ自体がおぞましい」

「…貴様ら！ どこまでエルフをおとしめれば気が済むのだ！ こんなことをして、天罰が下らないと思っているのか！」

「思っているよ。現実には、天罰など下っていないしな」

「……お前たちは、神が恐ろしくはないのか！」

「少なくとも、お前たちエルフの神など、まったく恐ろしくはないな」

「くっ！！」

駄目だ！ こいつらは本当に、私たちの神など、まったく恐れていないのだ！ 考えてみれば当然か。こいつらがエルフの神を恐れるなら、最初からこんなことをするはずがない——いや待てよ、なぜこいつらはそこまで？——。

「——貴様ら！ なぜそこまでエルフを憎む？！ なぜエルフを、そこまでおとしめる？！ いやそもそも、なぜこんなことをした？！ なぜエルフを滅ぼし、なぜエルフを家畜にした？！」

「なぜか、だと？——簡単なことだ。想像してみる、仮に、だ——もしこの世に、お前たちエルフを常食にしている種族がいたらどうだ？」

「——なっ！！」

「そうだ、そんな種族がいたら、お前たちもそいつらを心の底から憎んだらう？ 憎んで滅ぼそうと、根絶やしにしようとしただらう？」

「私たちが人間を食べるから、滅ぼしたと言うのか！」

「そうだ。人間を殺して喰うことは、お前たちにとっては当たり前のことでも、人間である我々には、絶対に許せないことだった。誰であろうと絶対に許すわけにはいかない、究極の大罪だった。——お前も学者だというなら、それくらいは解るだらう？」

「…………つまり、お前たちはこう言いたいのか！ 自分にとって当たり前のことが、他の誰かにとっても当たり前だとは思うなと！ 自分たちにとって当たり前のことが、他の種族にとっても当たり前だとは思うなと！」

「ほう、それに気づくか——。学者というだけあって、確かに頭はいいようだな。他のエルフはほぼすべて、気づく気配すら無かったぞ。我々も、お前たちのおかげで気づかされたようなものだ」

「くっつ！」

「そして、その逆もまた真なりだ。お前たちにとってはとんでもな

いことでも、我々にとっては当たり前のこと、この世には有る」

「……つまりお前たちから見れば、私たちエルフは、滅ぼされて当たり前だったと言うのか！ 皆殺しにされて当たり前だったと言うのか！」

「まさにその通り。我々にしてみれば、本当に、一匹残らず根絶やしにしなければ、感謝してほしいくらいだ。貴様も、問答無用で殺されなかっただけでも、感謝するのだな。」

嫌味つたらしく言うそいつに、齒ぎしりする私——。しかしこの時、脳裏に天啓のようなひらめきがあった。

「……ふざけるな！ 貴様らの理屈に従うなら、貴様らに、我々を責める資格は無いはず！」

「ほう？ なぜそう言える？」

「貴様らはエルフを家畜にしている！ すなわちエルフを殺して喰っているということだろう！ だとすればお互い様のはず！ 我々を非難する資格など無い！」

これで何も言えないだろう——そう思ったのだが、この言葉に相手の様子が一変した。その顔が真っ赤になり、凄まじいまでの憤怒が浮かび上がる。いきなり立ち上がると、私の顔を殴りつけた。

「ふざけるなっ！ 我々は貴様らとは違う！」

「エルフを喰ってはいないと言うのか?!」 痛みに耐えながら叫ぶ私。

「そうだ! 少なくとも知られている限り、我々がエルフを喰った例など無い! 貴様らを喰うくらいなら、我々は飢え死にする!」

「ではどういうことだ?! 家畜にしているということは、何らかのために役立てているということだぞ?!」

「……ああ、役立てているとも——。我々のなぐさみものとしてな」

一瞬その意味が解らなかった私だが、理解した途端、猛烈な怒りがこみ上げてきた。

「『なぐさみものだと』! つまり生き残りのエルフは、毎日お前たちに犯されていると言うのか?!」

「ああ、お前たちが、我々の子を孕むことは無い。それはすでに判っている。いくらでも安心して犯すことができるからな」

「——そのために、エルフを生かしていると言うのか?!」

「その通り——感謝するがいい。我々のなぐさみものとして役立つがゆえに、お前たちは生き延びられたのだから。そうでなければ、とうの昔に本当の皆殺しにしている。一匹残らず、根絶やしにしている」

「くっつ——!……」

「そしてお前も、もうすぐ舌と手足を切られて、家畜になる。我々に犯される、ただそのためだけの存在となる」

その言葉に、私は目の前が真っ暗になった。

「そんな！ 神よ！」

「ほう？ ここで神に祈るのか？」

「神よ！ なぜ私たちを助けてくだらないのですか？！ なぜあなたの手で、こいつらを滅ぼしてくだらないのですか？！」

「なぜか、だと？ ハハハッ、これはおかしい！」

「何だと？！ 何を笑う！ 貴様には、そのわけが判ると言うのか？！」

「判るとも！ そもそも、理屈で考えれば、可能性は二つしか無いだろう？ 一つは、『そもそも神など存在しない』」

「神が存在しないと言うのか？！」

「可能性を述べているだけだ。もう一つは、『神にとってのお前たちは、お前たち自身が思っているような存在ではない』」

「『我々自身が思っているような存在ではない？』……どういふことだ？！」

「お前たちエルフは、特別な種族ではなかったということだよ」

「何?!」

「神から特別扱いされているわけではなかった、ということさ」

「何を言う?! 我々エルフが、神に選ばれし種族ではなかったと言っのか?!」

「そうだよ。人間とエルフが、他の生き物とは一線を描く存在なのは、我々も認める。しかしお前たちは、少なくとも人間と比べて、特別ではなかった。人間とエルフは、本来対等だったのさ」

「人間とエルフが本来対等?!」

「そうだよ。本来対等であるべき相手を家畜にしたがゆえに、殺して喰らったがゆえに、お前たちは神から見捨てられた。我々の手で、天罰を下されたのさ」

「……馬鹿な! それでは、神の意志に従ったのはお前たちで、逆らったのは我々ということになるではないか?! お前たちが善で、我々が悪だったことになるではないか?!」

「その通り。だからこそ、お前たちエルフは滅ぼされた。我々の家畜に、獣に落とされた。お前たちは、神に見放されたのさ」

「馬鹿な! 私は信じんぞ! 人間とエルフが本来対等だなど! ダイニホンテイコクが善で、エルフが悪だったなどと!」

「信じようが信じまいが、事実が変わらぬと思うが?」

「く……そうだ! 仮に貴様の言う通りなら、そんな証拠がどこに

有る！ 貴様の言うことが正しいという証拠が、いったいどこにある！」

「証拠？ 証拠だと？ プ……………アッハッハッハッハッ！ ウウ
ッハッハッハッハッ！」

「なっ、何がおかしいっ？！」

「おかしいともさ！ なぜ気づかない？ 証拠なら、目の前にいくらでも有るではないか！」

「何？！」

「考えてみる。いま自分で言っただろう？ 貴様の言う通りなら、
とうの昔に天罰が下っていると思わないか？ 我々に」

「な……………」

「そう、貴様らが言うように、『神にとって、エルフが特別な存在』
ならば、『神がエルフの味方』ならば、とくに我々に、天罰が下
っている筈だ。しかし現実には、今や貴様らの方が人間の家畜だ。
天罰が下ったのは、貴様らエルフの方だった！」

「そ、それは……………これは！ これは我々エルフに、神が与えられ
た試練だ！ 遠からずダイニホンテイコクとやらに、神罰が下るに
決まっている！ 貴様らダイニホンテイコクは滅び、再び我々が主
人で、人間は家畜となるに決まっている！」

「フッ、残念ながらそれは無いな。まったく可能性が無い」

「何だと?! なぜそう言い切れる?!」

「第一に、貴様ももう見ただろう? お前たちエルフが、自力で我々を打ち負かせる可能性は、もうまったく無いのだ――」。第二に、仮に神罰が下って、我々が滅びそうになったとしよう。そんなことになったら、我々は滅びる前に、エルフを根絶やしにしておくさ。貴様らが再び、人間の上に立つことが無いようにな」

「なっ……」

「我々がその気になるだけで、家畜であるエルフは、あつという間に根絶やしになる――。貴様にも、それは解るだろう?」

「くっつ!」

「我々が滅びた時には、お前たちエルフは、すでに死に絶えている――。エルフが人間の下から抜け出すことは、もう永遠に無いのさ。この事実そのものが、正しかったのは我々で、間違っていたのは貴様らだという、証拠だと思わないか?」

「そんなっ!」

「少なくとも、『お前たちエルフが、神に選ばれた種族などではなかった』ことの、明白な証拠だと思わないか? 我々の言うことが正しく、貴様らの言うことが間違っていた、疑う余地の無い証拠だと思わないか?」

「そっ……そんな……そんなっ! 我々は、神に選ばれし種族ではなかったと言うのか! 我々の信じたことが、間違っていたと言うのか!」

「そうだよ。我々の信じていたことが正しく、お前たちの信じていたことが間違っていた。そうでなければ、そもそもこんなことにはなっていないだろう？」

「そんな……教えてくれ！　いつたい我々の、どこが間違っていたと言うんだ！　我々は、何を間違えたと言うんだ！」

「何もかもだよ。お前たちは、人間に関しては、何もかも間違えていたのさ——。自分たちが、神に選ばれた種族だと信じたことも、人間より自分たちの方が、絶対に優れていると信じたことも——
「そもそも、お前たちの言う『神が定めたこと』とやらが、でたらめだったんだ」

「でたらめだと?!……そんな?!　神の教えがでたらめだったと言うのか?!」

「その通りさ。何度でも言うが、お前たちエルフは、神に選ばれた種族などではなかった。神にとって、エルフは特別ではなかった。お前たちの言う『神が定めたこと』とやらは、少なくとも『人間とエルフの関係』については、すべてでたらめだった。何もかも、お前たちの先祖が、自分たちに都合のいいよう、勝手にでっち上げたもの——。それが、お前たちの言う『神の教え』とやらの、正体だったのさ」

「そんな……そんな……そんな馬鹿な！　そんな馬鹿なあつ！」

「そんな馬鹿なと言ったところで、何も変わりはない。正しかったのは我々で、間違っていたのはお前たちであることも。『エルフの神の教え』とやらが、でたらめのでっち上げだったことも。今で

はエルフの方が、人間の家畜であることも。貴様自身が、これから舌と手足を切られて、我々の家畜にされることもな」

「そんな……そんなあ……アア……ウア……ウアアアアアアアアアアアッ！」

数時間後、『野生のエルフ』を捕らえた二人の青年が、部屋に案内されて来た。椅子に縛り付けられたまま狂乱するエルフを見て、二人とも啞然とする。

「ど、どうしたんです？ これはいつたい？！」

「見ての通りだよ。こいつどうやら、突き付けられた事実そのもの、現実そのものに耐えられなかったらしい」

「現実そのもの？……それじゃ……もしかして……『大日本帝国を知らない』というのも、『エルフが滅びたことを知らない』というのも、本当だったんですか？」

「……こいつ自身は、『七十年前の世界から来た』と言っていた」

「七十年前？！！ まさか？！」

「さあてな、本当かどうかは、もはや確かめようもない。いずれにせよ、これでは売り物にはならんだろ。君たちさえ良ければ、こっちで処分するが？」

いかにも残念そうに、二人は顔を見合わせた。

「……………それじゃ、一度だけ、俺たちのなぐさみものにさせてもらいます。あとはそちらで処分してください」

「了解した」

こうして、エルフの博物学者マイラ・セムユート・サーワンは、警察犬の餌となって生涯を終えた。本来なら大きな話題となったはずの、『過去から来たエルフ』事件は、当人が発狂してしまったがゆえに、闇へと葬られた。

「このような事件が有ったこと」だけは記録に残ったが、「そのエルフが本当に過去から来たのか」は、確かめるすべも無く、当然、信じる者もほぼ皆無だった。

大日本帝国の警察内に、長年語り継がれている、言わば都市伝説である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4176r/>

『日本召還 外伝』

2011年11月15日12時34分発行